鬼は嘲笑う、鬼が嘲笑う

ねこのふすま

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼は嘲笑う、この世界に生まれた事を。

鬼は嘲笑う、人から鬼へとなろうとした愚か者達を。

鬼は嘲笑う、人の身で鬼へと立ち向かう者達を。

※２０２０／１２／１２

伊吹童子を予習してから、執筆予定

目次

その鬼、笑う。 1
鬼は心奪う 5
鬼の玩具 8
鬼は命令する 12
鬼と眠らぬ街 14
鬼と眠らぬ街・弐 17
番外編・服装（下着）について 22
鬼と鬼蜘蛛 24
鬼と父蜘蛛 27
鬼と父蜘蛛・弐 30
鬼と鬯（ちょう） 34
鬼と灯蛾 37
箸休め、小話 41
追儺 44
鬼に衣 46

その鬼、笑う。

「炭焼きのぼん、相変わらずちいさいなぁ」
年に何度か訪れる紫の着物を着た綺麗な女の人。
何時も此方を揶揄(からか)うように笑い、細腕で頭を撫でてくれる。
どんなに熱くても、寒くても何時も頭巾を被って着物姿で山を歩いてくる。夏の暑い日にも汗一つかかず、冬の寒い日にも羽織らずに現れる姿は子供の自分でも疑問に思う事があった。
「のんべえさん、あせかいたことあるの？」
残暑の日に訪れた女の人、何時も名前を教えてくれない。
常に酒の匂いが彼女から香り漂っているので、勝手にのんべえさんと渾名(あだな)をつけて呼んでいた。
のんべえさんは俺の言葉を聞いてかんらかんらと高らかに笑いながら手招きしてきた。
側に寄るとまるで上立香(うわだちか)の前にいるぐらいに、酒の匂いが強くなる。
「うちはな、お酒好きな鬼なんや。人やないから汗もかかへん。ほら見てみ、お角があるやろ？」
何時も被っている頭巾を捲り上げると、人には無い二本の角が生えていた。
それが人間ではない証拠、人ならざる者が持つ幻想の一部である。
恐怖はなかった。それよりも、逆に人でない事が分かった事で腑に落ちた事があるぐらい。
「じゃあ、ぼくをたべちゃうの？」
「ぼんじゃ美味くはないやろなぁ……。もっともっと成長したら考えたる」
優しくまるで硝子細工でも触るように自分の頭を撫で、せせら笑いをしながら手の中に飴玉を一つ手渡してくれる。
その様子を弟妹が見られていて、のんべえさんを囲う様に取り囲んで飴玉欲しいとねだり始めた。
止めようとしたけれど、のんべえさんが手で止めて弟妹達に着物袖

から取り出した紙袋を手渡す。
「金平糖、皆で仲良う分けるんやで」
甘味に喜んだ弟妹達は紙袋を貰って駆け出していってしまう。その後ろ姿を見ながらのんべえさんはまた笑う。
その視線、その言葉、その四肢、その体躯、全てが夢現の様に自分の身体や心が蕩く。
「ぼん、鬼に惚れたらあかんえ」
「っ!?」
おでこにデコピンをして揶揄う。
鬼が笑う、鬼が嗤う、鬼が嘲笑う。

その後の事は覚えていない。いつの間にか眠っていて母に起こされて目が覚めた。
のんべえさんの事を聞いてみても、そんな人はここに来たことはないと言われた。
あれは夢だったのだろうか……？

竈門炭治郎　竈門禰豆子
ぼんとぼんの妹が旅立った。
空き家となった家の前の五人が眠る墓の前で持って来た酒を開け、盃を満たしていく。
助けようと思えば助けられた。あの鬼擬きの手からこの子達を匿う事なぞ赤子の手をひねるよりも簡単だ。
ならば何故それをしなかったのか。何故あの子達の苦しむ姿を見なければならなかったのか？
物語の始まりを変えてしまえば、結末がどうなるか分からなくなるからだ。
酒が不味い。今までの中で一番の不味さに顔を顰めてしまうぐらいに。
（名前は……覚えてなかったな）
金平糖を美味しく食べていた子達の顔は思い出せるが名前は覚え

ていない。
　自分の生きる中では一瞬の出来事であり、人間が生まれてから死んでいくまでの過程なぞ瞬きするほどの時間にしか過ぎない。
（この世界に生まれ落ち、この姿になって、何百年、何千年と生きてきた。最初は何だこの痴女みたいな格好と気恥ずかしさに外も歩けなかったなぁ……今じゃあ照れの一つも感じない）
　生まれ落ちたこの世界（鬼滅の刃）、鬼（酒呑童子）となり生きてきた。
　思考は自分、容姿は他人、喋る言葉は鬼の言葉。
　中身は自分で皮は他人（酒呑）、そうなると自分が生きているのかどうかも曖昧に思えてしまうが、しっかりと意志はあるので自分は自分だ。
「ほんまに腹立つ糞男、早うあの面歪む姿が見たいなぁ」
　酒が残った盃を墓の前に供え、何処かで見ているだろう鬼に対して笑いながら布告をする。
　うちは鬼、あんたらは人から鬼のような化物になった鬼擬き。
　本当の鬼はもっと怖くて、もっと恐ろしくて、もっと潔い。
　醜くも世界に纏わりついて生きている事に必死になっている、あの腐れ顔を歪ませたい。
　まあ、これは達成できるものだからついでにでいいや。
（ぼんには悪いことしたな。けど君が行かなければ救われない人がいる、救えない人がいる。あくまでもうちは脇役、あんたが主役なんだ）
　角を隠す為に被っていた頭巾も供え、気配を消してから来た道を引き返す。
　もうすぐ日が昇ろうとしている。日には弱い鬼達が行動できなくなる時間が刻々と迫っている。
　うちは元から鬼なので、そんなの関係はない。
（しかし、日にも当たれないなんて不自由極まりないな。いやまてよ……あんた日の下に行けないの？　って揶揄うのも楽しそうだ）
　今度鬼にあったらやってみよう、そうしよう。
　楽しみが一つ増えたので悠々とした足で山を降りていく、そういえば町で新しい酒が出来たと親父さんが言っていた。
　後で寄り道がてらに顔を出していこう、おっと角を隠すのも忘れな

いようにしないと。

鬼は心奪う

その鬼の言葉には誘惑がある。その鬼の視線には蠱惑がある。その鬼の仕草には魅惑がある。

常に酔い痴れたようにふらふらと漂うように生きながらも、楽しむ事だけを第一に色々な事へと首を出す。それが自分の命を狩る為に来たものだとしてもそれもまた一興だと笑い飛ばす。

長い事人を喰らわずに生きていても鬼には飢餓は無く、美味い酒に美味い料理、食べ頃の女（性的な意味）を楽しむ。

人を喰らう事もできるが必要もないし、喰えば喰ったで面倒が転がり込んで来る事も目に見えている。その面倒も楽しそうではあるが、先を見据えるならば我慢しなければならない事もあるのだ。

横ですやすやと眠る女を置いて、生まれた姿のまま部屋の中を歩く。

用意されていた着物を纏って部屋から出て外へ行くと日は丁度頭の上、お腹空く昼間になっていた。

興が乗りすぎてまぐわい過ぎたのが仇となったか、先程まで傷んでいた腰を軽く叩きながら欠伸をする。

不意にうどん屋の屋台が目についたのでそのまま屋台の椅子へと座る。

「おっちゃん、うどん一つ」

「あいよっ！」

鬼の身体からは何時も酒の香りが漂う。それで人を酔わせて蕩かす事も出来るが日常生活を送るためには人を一々誑かしていれば何時か背中から刺されかねない。

必死に抑える事に専念をして、こうやって日常生活を送る分には支障を来さない様に出来る様になった。

面倒なので、食べ終えればまた直ぐに酒の香りがするのはご愛嬌。

今日はまだ酒を呑んでいない、素面姿に近いのでさっさと何処かで一献したいものだとうどんの汁まで飲み干してお代を置く。

「ごちそうさま、美味しかったで」

食い終えればゆっくりとした足取りで人混みの中に消えていく。
ふらり、ふらりと常に夢現の中を歩んでいくように当てもなく進んでいく。
前を見ずにふらふらと軽い足取りだったせいか、誰かの背中にぶつかってしまう。鬼は三尺八寸二分（145cm）と小柄、対してぶつかった相手は四尺二寸（約160cm）ぐらいの身長と鬼よりも高い。
「かんにんな、前見てへんかってん」
鬼がぶつかった相手は黒髪の美しい少女。
名を胡蝶カナエ、後の花柱となる鬼殺隊の剣士であった。

あの人の第一印象は、とても可愛い人だった。
任務が無いのでしのぶの髪を結うための髪留めを町に買いに出た時、あの人は私の背中にぶつかってきた。
その顔を見て、視線と視線がぶつかった時に妙な高揚感を感じた。
ほわほわと宙を舞うような、親が呑んでいたお酒の匂いで酔った幼い時の事を思い出してしまう。
「かんにんな、前見てへんかってん」
ゆっくりと背中から離れてはんなりとしながら笑みを浮かべた。
心が吸い寄せられる、自分よりも身長が小さくて触ってしまえば壊れてしまうような小さな身体に心が惹かれていた。
これはいけないと呆けていた心に鞭を打ち、笑顔を取り繕う。
「大丈夫ですよ、こちらこそ立ち止まってすみません。それよりもお怪我は無いですか？」
私の言葉に少し間を開けてから口元に手をやり、くすくすと笑いながら口を開く。
「お人好しどすなぁ、うちがぶつかったんやさかいうちが心配するのが普通やのに」
一歩、また一歩と近寄ってくる。
その度に心臓の鼓動が高まって胸が波打つのが自分でも分かるほどになっていた。
身長の差があるので顔の近くまでとはいかないが、本当に目の前で

含み笑いを魅せながら手に何か握らせてきた。
「ええ子にはご褒美や、妹はんと食べや」
まるで子供をあやすように言って彼女は踵を返して歩いていってしまう。このまま呆けていればもう二度と会えない、そんな気がして思わず彼女の腕を握ってしまっていた。
そこには先程までの笑みは無く、驚いたかのように目を点としていた。
「お名前、お名前を教えていただけますか？」
精一杯、今聞ける精一杯の言葉がこれだった。汗が流れる、言葉につまる、呼吸が苦しい。
間の後に唐突に彼女から手を引かれ、しゃがみこむ形で彼女によりかかる。
耳元に口を当てて周りに聞こえないように小さな声で囁く。
「うちはな、酒呑って言うんや。可愛いお嬢はん、また何処かで」
腰が抜けた囁きだけでだ。最初に言った可愛い人と言ったのは前言撤回、とても恐ろしい人。心を骨抜きにするような蠱惑の塊の様な人だ。
周りの人に起こして貰えなかったらそのままへたり込んでいただろう。恥ずかしい……。
（あれっ？　私に妹がいるって……言ったっけ？）
胡蝶カナエは頭を捻り、考える。
そういえばと思いだして彼女が手に握らせてくれた物を確認する為に手を開いてみた。
そこには飴玉が紙に包まれて二個入っていた、それを見て私は子供扱いされていたのだと少しだけムッとした。
次会ったら、子供扱いされないようにしっかりしないと！

鬼の玩具

酒呑童子は悩んでいた。何に悩んでいるのかと言うと。それは酒呑の下敷きにされている鬼の娘の境遇について。

何時もの酒呑なら鬼に出逢えば、揶揄い、冷やかし、最後には文字通り骨抜きにしてから日に曝す。

たまに命乞いをつまみに酒を呑む事もある。

そして今回、座布団代わりに使っている鬼は下弦の称号を持つ者。

（確か、下弦の肆だったけ？）

目を潰してしまったので、再生するまで数字は確認は出来ない。普段ならば面倒なのでそんな事はしない、だがこの鬼はあろう事か酒呑を目にして逃げようとした。

逃げる獲物をはいそうですかと逃がすわけもなく、ひっ捕まえて暴れぬようにと四肢を潰す。

泣き喚くのが五月蠅いので。着ていた着物を破って喋れぬように詰め込んでおいた。

つまり動けぬ、喋れぬ、見えぬの三重苦。

（んー……物語も始まっているし、そろそろ色々な行動に移してみようかな？）

下弦は何れ解体される。残っている記憶では鬼にした阿呆者が自ら手を下していた。

それならば今、下弦が欠けようとも支障は無いだろう。そうだろう。

下弦の肆は女型の鬼、大抵の鬼が男型なので珍しいのもあったが、酒呑には逃げる際の切羽詰まった表情が印象に残っている。

記憶には無いが、どうしてか何故か構いたくなる。言うならば可愛い子犬を見つけ、撫でたくなる様に。

「なぁ、あんた。死にたくないんやろ？」

耳は千切っていないので声だけは聞こえる。下弦の肆こと零余子は首を縦に振り、生きる為に藁にも縋る気持ちであった。

「ならな、うちが振る舞う酒の一滴を血に混ぜたるから、其れに耐え

切ったら生かしたる。簡単やろ？」
　返答を聞かず、酒呑は立ち上がり何時の間にか手にした盃をゆっくりと傾けていく。満たされる酒は酒好きの鬼さえ酔わす、酒呑童子を屠る為だけに醸された毒酒。
　それのただ一滴、その一滴が零余子の傷口へと堕ちる。
（まあ、殺された方がまだ幸せかもしれないけどね）
　耐えれば鬼ならざる者に、耐えれなければ鬼だった物になるだけ。
　全身をひっくり返されるような痛み、痛みの次に快楽がまた全身をかけめぐる。身体の再生など二の次、零余子は生きるためだけに無限に続く苦痛（快楽）に喘ぎ凌ぐ。

　私は鬼狩りと対峙する際、何時も逃げたくなる気持ちがあった。
　鬼狩り、それも柱と実際会うかもしれぬという可能性があるならば、無意識にその場から遠ざかり。常に生きる事を優先にしてきた。
　あの人に出会ったのもそんな日の夜の事。
　私を見つけ、嘲笑いながら見つめるその紫の瞳に見つかった時、心臓を掴まれる様な恐怖を感じた。服装は痴女ではないかと疑いもしたが。
　――あの御方の御前にいる時の様で全身が総毛立つのを感じる。
　脚は思考よりも早く動きだし、次の瞬間には逃げる様に真反対へ駆け出していた。
（あれはやばい！　あれは見ちゃいけない!!　何であんなヤツがいる!?　とにかくここから離れなくては……!!）
「つかまえたぁ」
「……え？」
　頭を掴まれ、地面へと押し付けられる。全身にかかる力は想定した物より強く、肺の中の呼吸が無理やり外に吐き出される。
　流れるように右腕、左腕を潰し。右足、左足をもぎり潰した。一切の躊躇も迷いもない攻撃で私は動く事が出来なくなった。
　叫びたくなる気持ちを抑えて、身体の再生をしようと閉じていた瞳を開くが……開いた瞬間に指で目を潰してきた。

抑えられない痛みに叫びをあげると、私の着物を破って口の中に捻りこませられた。
どうして、どうしてこんな事になった？　これが人を喰らった罰とでもいうのか？　鬼となった罰とでも言うのか？
「――――!?!?」
「なぁ、あんた。死にたくないやろ？」
痛みに悶ていると、優しい声色で恩情の言葉を投げかけられた。
何時の間にか私の身体に乗っていた事は置いといて、もしかしたら助かるかもしれない、そんな希望に疑いもせず首を縦に振った。
何も見えない、動けない、喋れないので相手が何をやっているのかは分からなかった。
――――衝撃は身体を貫く様に走る。
全身の血管という血管の全て、流れているあの方の血を喰らうように一滴の何かが身体を冒していく。
呻き、叫び、泣き、悶え、喘ぎ、何時の間にか口から布を吐き出して叫び声をあげた。
「う…ぐぐ…っぐっはッいやぁぁ……ッ……うぇぇ……ッ！うご、あぁああッ！うっ…うう……ゴボッ！おええッ……ぐ……！」
「うちが振る舞う酒の一滴を血に混ぜたる、其れに耐え切ったら生かしたるわ、簡単やろ？」
声なんて届いていなかった、気を確かに保つ事も二の次。
何が起こっているのかも分からないまま、永劫の責苦に苛まれるしかなかった。
――――どうして、どうしてこんなことに？

思ったよりもエグい事になっている、相手が鬼でなければ自分がやった事に後悔していた。
これは死んだだろう、穴という穴から血を垂らしているし。
自分が見た事も無い痙攣をしたと思ったら急に動かなくなったし。
何故酒を鬼に垂らしたかと言うと、この盃から生まれた神便鬼毒の有用性を確かめるためだ。

これは人が飲めば力を得る事が出来て、逆に鬼が飲めば力を封じ込める事が出来る酒。
それを人であった鬼に使えば何方の効果が出るのだろう、そんな些細な疑問から実験を行っていた。
大抵は直ぐに肉を腐乱させ、塵も残さずに消えてしまうが今回は下弦の名を持つ鬼。
もしかしたら、もしかしてがあったかもしれない。
直ぐには腐乱せず、塵にもならず肉体は残っているがこれはもう生きていないだろう。
確認が必要なので、身体を揺するために手を伸ばす。
「し、に……うぐっ、たくない！」
「へぇっ……」
驚いた、とても驚いた。死んでいない、死んでいないどころか命乞いをして腕を掴んできた。
順応したのか？こんな少しの時間で生きたいが為だけに、乗り越えてしまったのか？
「ええ子、ええ子」
もしかして、とんでもない者が生まれてしまったのかもしれない。
再生していく手足、再生する眼をじっと観察しながら一つの希望を期待していた。
手足は完全に再生し、潰した瞳も再生が終わった。
――数字は消えていた、こりゃたまげた。

鬼は命令する

下弦の鬼には片目に下弦の下の文字と数字が刻まれる。上弦の場合は片目に上弦、もう片目に数字が刻まれている。

目の前で正座させている下弦の肆の場合なら、下肆と本来は刻まれている筈であった。

「ないなぁ……」

「ひえっ……!?」

下弦の肆の両頬を両手で触り、息が当たる距離。恐怖を与えるぐらいの近さで観察する。

見間違いではなく、刻まれていた下肆の文字は消え失せている。つまりは鬼にした鬼舞辻無惨（おばかのろう）の呪縛から外れているかもしれない。

もしも呪縛から離れてなかったとして、死んでも酒呑にとって支障は無い、それどころか結果が手に入るならば万々歳。

手を離し顔を離し、震えている零余子に命令をする。

「なぁ、鬼舞辻って言うてみい」

「そ、それだけはご勘弁を。わ、私が死んでしまいますっ！」

白い肌が青くなっていく、鬼舞辻無惨から植え付けられた恐怖は未だ下弦の肆、零余子の心を鷲掴みして離さない。

例え言わずに殴られようが蹴られようが、死にたくは無いので言えない。それが呪から放たれていたとしてもだ。

けど、言えないと言われたら言わせたくなるのが性なのだ。

「なぁ」

もう一度、頬に手を当てる。

優しく優しく、硝子細工を扱うかのように丁寧に指を這わせて行く。顔を近づけ、息と息が混じり合って蕩けてしまうぐらいの距離でゆっくりと唇を開く。

「なぁ」

声音、吐息、視線、動作の全てが酔の中。

酒呑童子が日ごろ抑えていた、果実の酒気が華開くように辺りに充満していく。

「なぁ」
口が閉じれず涎が垂れる。瞼を閉じれず泣いてしまう。
頬は赤らみ身体が熱くなる、思考は最早追いつく事さえも出来ない。
唯一思えた事、それは言えば楽になれる諦めの心。
「き、……ぶ、つ……じ……？」
言った！　言ってしまった！　名前を言ってしまった!!
呪いが残っているならば瞬時に零余子は言ってしまった代償として、再生出来ない代償を受け握り殺されるだろう。
しかし、言ってから十秒、一分、二分と経っても呪いが発動する事は無かった。
（ふむふむ、呪いは外れている。つまりは神便鬼毒により血が流された、恩恵は無くなったが呪いも無くなったと考えるのが普通か？）
果実の酒気を抑え込み、未だに死なぬ零余子を観察しながら仮説を立てていく。
零余子は意識が保てず、又もや気絶した。しょうが無く零余子を米俵を抱えるように抱え上げてその場から去ることに決めた。
――零余子は重要な実験結果を残した。
しかしこのまま放っておけば結局は鬼舞辻の手にかかるか、鬼狩りによって頸を撥ねられて終わるに違いない。
今の零余子は普通の鬼、鬼舞辻が生み出した紛い物ではなく酒呑童子と同じ様な鬼となった。お天道様の下を闊歩する事は出来る、しかし頸を斬られずとも死ぬ事にもなる。
だが、違いは何れ歴然となり大きな差を生むことになるのだ。
深くは考えず、丁度弄る相手も欲しかった酒呑にとって、遊び道具（玩具）が増えたと軽く考え、零余子を世話をする事に決めた。
――なお、零余子には拒否権はない。

鬼と眠らぬ街

どうもこんにちは、こんばんは元下弦の肆、零余子です。
運も悪く鬼狩りから逃げようとしていたら、もっと恐ろしい人と出会ってしまいました。
出会い頭の暴力、次は脅迫、そして実験台になりました。死にはしませんが死ぬところでした。
改めて思いますが、よく生きていたと自分を褒めたくなります。
(涙出そう……)
……今は何をしているか?
あの人の隠れ家で一人お留守番をしている所です。
あの人は何時も唐突に出かけ、唐突に帰ってくるので、今は自己防衛の力を得るまではここでゆっくりとしています。
あの時、意識を失っていた私はここへ連れて来られ、目が覚めたら衝撃な真実を告げられました。
ついでに質問(脅迫)もされました。
今の私は血鬼術は使えない。
きっ……鬼舞辻の力で鬼になっているのではなく、鬼其のものになっているらしいので使用する事が出来ないらしい。
その代わり身体能力は今までの倍以上、身体の再生能力の速さが上がっているらしく、しぶとさに全振りされた様な身体になったらしいです。
前のように頸を鬼狩りが持っている刀で斬られるか、日光に浴びて殺されると言う事は無いそうですが。
どんな刃でも普通に斬られれば、うちやあんたは簡単に死ねると言われました。
え、それって弱くなっていませんか?
そう口には出したかったけれど、ぐっと心の中で抑えていた。
しかし表情から考えていることを読み取られたのか、私の角を掴まれて折檻されました。痛い……。
あの人はやれやれとため息を吐きながらも説明はしてくれた。

これがあの御方だったら、命が磨り減っていたのだろう。まぁ、今の状態でも色々なモノが磨り減っていますけど……。
死ぬと言う恐怖は生きる故で大事な事、頸や日光を浴び無ければ死ないと言う傲慢は油断や隙を生む。
日光を浴びれる様になったのだから、日光浴でもしながら生きる為に色々と考えろ。
丸投げされた気分ですが、言いたい事は何となく分かったような気がする……？
そんなこんなで縁側で日光浴しながらお茶を啜り、お留守番をしていると言う事に繋がるわけだ。
日光って暖かくて、荒んだ心が癒やされる様な気持ちになる。
今までは恐怖しか感じなかった物がこうも変わるとなると、ほんの少し……本当にほんの少しだけこの身体に変わった事を喜ぶべきかと思った。
（ふわぁっ……眠いなぁ）
この身体になってから色々な欲を感じるようになった。
食欲、これは人間を食べたいという飢餓ではなく普通の料理などに対する食欲が生まれた事。
睡眠欲、今のように日光の暖かさで眠くなる様な事も起きるようになった。
あとの欲求は……割愛で、聞かないで。
（今日はどこに行ってるのかなぁ……えっと、珍しく行き先を言っていたけれど確か）
場所は浅草だったっけ？

――東京府、浅草。
夜になれど眠らぬ街。灯りが夜なれどこんこんと行き交う者達を照らし続ける。
三階建ての建物が立ち並ぶ中、人に紛れて酒呑は行く。
今紫色の着物、万寿菊の模様をあしらえた特別な着物を着て、頭巾を被る。

着物に合わせた羽織りを着崩しながら歩く様は酒呑が小さな背丈であろうとも、艶姿は気づく者を振り返らせるぐらいに美しくあった。

（相変わらずやかましい、賑やかなのはいい事だが）

道中、何度も声をかけられたがのらりくらりとやり過ごして表通りから少し離れた路地で一休みをする。

こうも厚着をするとどうも動きづらい、何時もの服装の方が快適だとため息を吐く。

態々、夜の浅草に顔を出した理由はただ一つ。

（流石に下弦に手を出せばバレるよねぇ……）

――鬼舞辻無惨との密会の為に訪れた。

零余子を掌中に納めてから数日後。伝言役兼酒呑を殺す為に使われた使い捨ての鬼から、浅草にて待つと言われた。

別に行く必要も義理もないのだが、無闇矢鱈に刺激するのも後の厄介事に繋がる可能性がある。

それに、丁度暇でもあったので茶化す為に酒呑は赴く。

「辛気臭い面やろうなぁ……えんがちょ、えんがちょ」

鬼と眠らぬ街・弐

とある料亭の一室、招かれた酒呑は一人で酒を嗜む。
相手は未だ訪れず、只々待ちぼうけるだけ。腹がたつのでこの店で一番高い酒を頼み、一番高い料理を出してもらって食事を進める事に。
ふと時間が経つにつれ、辺りから人の気配が消えていく事に気づく。
（人払いか……？　はたまた本当に消えていっているのか？）
この場所は名を出せぬ者達にとっては恰好の密会場所、だが顔や名前を知られる事を嫌う鬼舞辻無惨にとってはそれも嫌悪の一つに含まれるだろう。
（まぁ、これで料理は食べ納めかな）
可哀想に、そう思いながら一口、また一口と酒呑は料理を食べる。数日もすればこの場所すら消えて無くなり、全ては闇の中に消える。
――襖が開かれ、人食い鬼の祖、鬼舞辻無惨が現れた。

【鬼舞辻無惨視点】
「うちを待たせるなんて、いい度胸やね」
私の眼前で憎たらしい顔をして、笑みを浮かべるコイツが嫌いだ。生きていることすら許したくない、すぐにでも殺してその血肉を踏み台にして私は完全になってやりたい。
だが、私もこいつも闘う事になれば相応の犠牲が伴う。賭ける価値に対して見返りが返ってくる確率が低すぎる。
「刻は指定していない、そもそも指定していたらお前は私を待たせていただろう？」
「あら、バレとった？」
わざとらしい態度、わざとらしい言葉、わざとらしい存在。この私でさえも、子供の様に茶化そうとしている。
このまま話をしても時間の無駄になる、なので早々にこちらが言いたいこと告げる。

「下弦が欠けた」
「そうなん？　度々替わるさかい気にしてへんかったわ」
「手を出したな？」
　部屋が揺れる程の威圧を発しても、悠々とした態度でお猪口で酒を呑んでいる。どこもまでも面が厚い女だと最早感服してしまう。
　猪口を置いたアイツは惑わすように妖艶な目で此方を見て、口元をつりあげて嘲笑う始末。
「えらい可愛いこだったからついな。おぼこやったけどいいもん貰ったわ、おおきにな」
　欠けようが、死のうが、醜かろうが、そんな事は私にとってはどうでもいい。どれもこれも、全てはどうでもいい事だ。
　だが、私の為に動く駒をこいつに取られる事は腸が煮えくり返るぐらいに腹が立つ。
　死ね、醜く死ね、惨たらしく死んでくれ。
「お前は、何方側なんだ」
　鬼なのか、人なのか。鬼と言いながら人を守るのか、鬼と言いながら人を喰らうものなのか。
　何方側にもいて何方にもいない、蝙蝠のようにふらふらと飛び回る様は最早捨て置けぬ。
　――瞬間、こいつの雰囲気ががらりと変わった。
『私は楽しい方の味方』
　私が初めてこいつに出会った時を思い出す。
　こいつは喰らいたい物を喰らい、欲しい物を欲しいがままにして、張り付いたような笑みを何時も周りに振りまいていた。
　その時と同じ様な笑顔で、その時と同じ様に語りかける。
『奪い奪われ、喰らい喰らわれ。人は鬼を殺し、鬼は人を喰らう。しかしな、臆病者。鬼は人がいなければいけない、だが人は鬼がいなくても生きていける。お前は、尾を踏み過ぎた、報いが何れくる』
『私も報いを受け何れ死ぬ。殺したのだから恨まれるのは当然、恨みが消えようが何れ廻り廻って報いを受ける――』
『その時に嗤って死ぬか、怯えて死ぬか。それがお前（鬼）とわたし（鬼）の違い

だ』
理解しがたい言葉。やはりこいつは死ぬべきだ、殺すべきだ、今すぐ死んでくれと言葉を投げかけると、私の帽子を奪い頭に被りながらこう言ってきた。
「あんたも死ね」

【酒呑童子視点】
密会は無事（？）に済んだ。これで私とあいつ（鬼舞辻）は敵同士。まぁ、昔から味方言うわけではないがあれが明確な決別になる。
あいつが人食い鬼になる時、私は荒れに荒れていた時期。
確かにあいつにも出会ったし、会話もした事がある。
しかし、決定的にあいつとは反りが合わない。硬貨の表と裏のように、永劫に交わることは無いのだ。
（腹にたまらない料理だったな……そうだ、確かこのあたりにはうどん屋の屋台をやっている親父がいたな）
昔を思い出しながら街の中を進んでいく、記憶だよりなので迷ったりもするが、行きあたりばったりの散策は面白い事に出会える切っ掛けになる。
（あったあった……んっ？）
「俺はな！　俺が言いたいのはな!!　金じゃねぇんだ!!　お前が俺のうどんを食わねって心づもりなのが許さねぇのさ!!」
親父さんが座っている女の子に対して何か文句を言っているようだ。しかし女の子はそれを理解出来ていないのか、呆然としているだけ。
これは面倒な事が起きていると本能が告げるが、女の子の顔を見て私は思わず口を開いたままにしてしまった。
（あれは、ぼんの妹の禰豆子？）
思わず駆け出して、うどん屋の親父さんの肩をつついて意識を此方に向かわせる。
「なぁ、どうしたん？」
「あぁっ？」

事情を聞いてみると、炭治郎は禰豆子を置いて誰かを追いかけて行ってしまった。そして残された禰豆子は食べる事が出来ない、それをワザと食べないと勘違いされて食えと言われていた。
やれやれとため息を吐き、着物の裾から小銭を取り出して親父さんに渡す。
「……うちが食べるわ、その子はうちの知り合いやから許してや？」
「……まぁ、食べるならいいけどよ」
出来上がったうどんを受け取り、禰豆子の隣に腰を下ろす。
禰豆子は何も言わず只々じっと此方を見てくる。鬼舞辻の血で鬼になってしまえば、人以外は食べられなくなる。
そして人を喰う事を禁じている為、禰豆子は竹の口枷をしているだろう。
なので私が食べる姿じっと、じーーっと、見つめているのでとても食べづらい。何か与えられる物は無かったかと食べ終えた丼を置いて裾の中をまさぐってみる。
飴、飴、飴、お金、無惨の帽子、飴、飴、おっ……？
「ええのがあったわ」
「むっ？」

【竈門炭治郎視点】
置き去りにしてしまった禰豆子を迎えに行き、うどん屋の店主さんに詫びを入れる。頼んだうどんを食べますと言ったが。
「あんたの知り合いとやらが代金払って、食べていったぞ」と言われてしまい、頭を捻る。
（誰だろう、俺の知り合い……？）
微かに残る酒の香り。何処かでこの香りを嗅いだことがあるような気がするけれど、思い出せない。
さらに頭を捻っている時、禰豆子の髪型が何時もと違う事に気がつく。
「禰豆子、どうしたんだそれ？」
「むぅっ！」

紫の水引によって禰豆子の後ろ髪が一つに纏められていた。
水引からも漂う酒の香り、香りを嗅ぐ度に何かを思い出せそうな気がした。
けれど路地の角に人影を見つけてしまい、思考が中断してしまって誰かの事を思い出すことは出来なかった。

番外編・服装（下着）について

縁側で黄昏れながら私は酒を呑み、考える。
どうして……この時代の着物には下着を穿かないのであろうかと。
乳や下腹部を最低限隠す衣装を着ている私はたまに考えることがあった。
時代は大正時代、今の下着事情は間違ってはいないのだが考えてしまうことがあった。
男性はふんどし、女性は湯巻。しかし着物の女性は下着を何もつけないのが普通なのだ。
（そう考えると……この最低限なこれも破廉恥ではないんじゃないかな？）
盃に満たされた酒を呷り、月を見ながら考える。
その様はとても美しく、絵にはなっているだろう。考えている内容さえ除けば誰をも魅了する事が出来ただろう。
零余子は私が考えている事が碌でもない事を理解しているだろう、だからこそ零余子に質問を投げかける。
「なぁ、下着穿いとる？」
予想よりも厄介な質問が飛んできた事に零余子は頭を抱えていた、しかし鬼ならば嘘偽りなく答えるしかない。
「着物ですから……穿いてはいませんよ」
零余子もこの時代の人間だった、それならば考えていた通りの答えが帰ってくる。
ふと思うことがあり、零余子の身体をなめ回すように観察する。
濃い紅色の着物のせいで身体付きは分かりづらいが、女性としては魅力的な胸や身体付きをしている。サラシをとって身体付きを分かりやすい服装にすれば男なぞ手玉に取れるだろう。
（少し弱気な性格が玉に瑕）
私が持っているこの最低限隠れる衣装を着せれば、少しは弱気な性格を矯正できるのではないだろうか？
楽しそうだけれども、着た姿を想像してみると何故かイラっとく

る。零余子の癖に助兵衛な身体付きしているのが腹が立つ。
「零余子の助兵衛」
「ええっ!? なんで助兵衛なんですか?!」
思った答えと違ったのか零余子は驚きながらも、口答えをしてきた。零余子の癖に生意気だぞっ！
そんなわけで予備に作って貰っておいた衣装を零余子の前に差し出し、揶揄う為に盛大に笑みを浮かべる。
「これ着てみい」
「え」
「着て」
「お、お許しを……!!」
私に慣れてきたのか最初の頃と違い、中々首を縦に振らなくなってきている。
仕方がないので身体を起こし、零余子の側まで寄ってから……角を掴んでぶつかりそうなぐらい顔を近づける。
「助兵衛ちゃうんやろ？ なら、着てな」
「……は、はい」
果実の酒気で惑わせ、威圧を込めて心を折る。
別に虐めたくてやっているわけではない、これも親心……いや鬼心としてやっているだけなのだから。
もっと強くなってほしい、だから厳しくしているのだ。
(何故か、零余子の身体付きが良いのは腹が立つな……私があまり胸がないからか？)
涙を流しながら着替える零余子を見ながら、自分の身体を見れる範囲で観察してみる。確かに胸は無い、細身な身体なので子供と思われなくもないだろう。
ならば、私の格好は痴女ではないな！身体にあった相応の服装であるな!!
尚、着替えた零余子を見て苛立ちが高まり、零余子はまた泣くことになった。

鬼と鬼蜘蛛

竈門炭次郎の物語が那田蜘蛛山（なたぐもやま）に差し掛かる間近、山の調査を任命された十一名の鬼殺の剣士達は闇世の森の中を進む。

剣士の一人、村田（むらた）は辺りに鬼の気配がないか警戒する中、一つの違和感を感じていた。

どうしても山へ訪れた時の人数と、今いる人数に違いがある気がする。

（一人多い……誰が増えたかは分からない。けど、やっぱり一人多い！）

疑問に思っても口にできない理由は、確固たる確証が村田自身が用意出来ないためだが、他の九名の剣士達も心中では同じ事を思っている。

村田の視線が左後ろを歩くダボついた隊服を着る小柄な女剣士に向けられる。袖頭巾を被り、表情が判別しづらいが口元だけははっきりと見えた。

笑っている、この状況下で小柄な女剣士は笑っている。

しかし疑おうと頭を働かそうとするが、何故か上手く考える事が出来ず頭に靄（もや）がかかっているような宙ぶらりんな状態になっていた。

この山に入って、人数に違いを感じてから甘い果物の香りが漂う。最初は鼻をつくような刺激臭が風に漂ってきていた。しかし今は果物の山の前にいるように、甘ったるくて蕩けるような感覚が全身を包む。

（まあ、いいか……うん）

村田は考える事を止め、ぼんやりとしたまま歩いていく。

十名の剣士たちを見ている袖頭巾の剣士はまたくすりと笑い、後をついていく。

一人、また一人と力が抜けていき座り込んでいく。その姿を心配もせずに残った者達は先に進んでいく。

（甘い、甘い、甘ったるい）

村田は最後の一人になりながらも、必死に考えながら歩いていく。

不意に肩を叩かれて振り返る、そこには袖頭巾の剣士が村田の後ろで覗き込む形で嗤っていた。
「もう一人やで」
鬼は最初からいた、紛れていた。甘い空気が一瞬で霧散、柄に手をかけようとするがそれよりも先に刀の頭を手で押さえられて抜刀する事が出来なくなった。
空いた手で袖頭巾を捲り上げる、視線が合う。呼吸の音を聞いてしまい、その存在を認識していく度に村田な意識は朦朧となる。
鬼は頬の上に、描いたような笑みを漂わせながら言の葉を紡ぐ。
それが村田が意識を手放す前に聞いた最後の言葉だった。
「ねんねしなはれ」

物語が蜘蛛の山に近づく最中、偶然にも出会った鬼殺の剣士とひと悶着あり。どうしてか意識を手放した剣士から衣服だけを奪い取り、那田蜘蛛山を調査しに来た剣士達に紛れてみた。
直ぐにバレてしまうんでないかと、ワクワクはしていたがこちらをチラチラと見はするが誰も声を上げなかった。
しかしこれでは身動きが出来ない、仕方がなく剣士達を酔わせ蕩けさせてようやく一人となれた。
遠目からぼんの成長具合を見るためだけに来たのだが、これなら普通に入山していた方が楽だったかもしれない。
「えらい着心地がええわ、こら気に入りそう」
通気性が良いが濡れづらく、燃えづらい。実験してみたから分かるがちょっとやそっとの力では破けない。
隊服を剥ぎ取られた剣士に感謝をしつつ、倒れた剣士達を一箇所に纏めて置いてから先へと進む。
(蜘蛛、蜘蛛、子蜘蛛。やっかいな奴ら、いっその事酒で満たしてしまえば蜘蛛の心配をしなくてすむかな？　いや、山が臭くなるなぁ……)
糸に絡めとられない様に歩きつつ、何処か高みで見物出来ないかと場所を探す。この山に来るぼんならば見ていて飽きはしない。

軽い足取りはさらに軽くなり、鬼殺の服を着ている鬼と言う冗談の様な鬼は那田蜘蛛山の中を歩いていくのであった。

（そういえば最後の一人、何処かで知っている様な……いないような。うーん……誰だっけ？）

哀れ村田の名前は思い出せず、せめてもと隊服を奪った剣士の事を思い出す。総髪の美人な女剣士、ありがとう。流石に全裸は可哀想なので羽織をあげたので許して欲しい。

鬼と父蜘蛛

蜘蛛の糸と聞けば救いのお話と思うが、ここでは生者であろうと死者であろうとその身体を操る糸。どの様に手足が曲がろうとも、どのように身体が拉げようとも糸が繋がっている限り延々と操り人形となる。

死に体になった鬼殺の剣士が刀を振るってくる、素手でそれを避けて距離をとっていつの間にか出現した青い瓢箪から剣を抜く。

糸に絡めとられるので徒手空拳は相性が悪い、骨を抜いたとしても身体があれば操り人形のまま。

ならば、剣で身体として使えないように斬ってしまえばいいだろうと考えた。

死に体となっても戦わされるのは可哀想なので、慈悲の心で斬ってやろう。

「かんにんな」

血流が滾り、四肢に異常なぐらいの力がこめられる。

放たれるのはただ一振り、人間では見えぬ動きで地面を蹴り上げて剣を真上から振り落とす。普通なら両手で使う剣を事もあろうか片手で振る。

振るわれ斬られた身体は縦に真っ二つ。糸も切り裂かれ死体は血を流しながら地面に転がる。流石に等分されれば使えないらしい、剣を地面に下ろし死体の前で手を合わせておく。

(さて、次が来る前に先に進んでおかないと)

剣はしまわずに、片手に携えたまま先へと進んでいく。闇夜の森は方向感覚が無くなるので、どちらに進めばどの鬼に見つかる等も分からない。

いきあたりばったり、運命は神のみぞ知るのであった……と黄昏れていると草葉の陰から生き物の気配を感じて立ち止まる。

「カァッー!」

「……鴉う?」

やけにボロボロな鴉が顔を覗かせ、此方に何か言いたげな感じで辺

りを跳ね回ってから隊服をつまんで引っ張ってくる。
まるでこっちに来てほしいと訴えている用に思え、行く宛も無いので鴉が連れていきたい場所へとついていくことにした。
嘴平伊之助（はしびらいのすけ）は脱皮した蜘蛛の鬼と対峙する。蜘蛛の鬼は脱皮をした事で図体も大きくなり、放つ威圧は脱皮前とは比べものにならないぐらい強大になっていた。
対峙する伊之助が思わず、勝てないと思い。自らの死期を悟ってしまうほど。しかし、竈門炭治郎（かまどたんじろう）の死ぬなと言う言葉。藤の家紋の家での出来事、言葉を思い出して奮起する。
「俺は鬼殺隊の嘴平伊之助だ！　かかって来やがれゴミクソが!!」
言葉とは裏腹、蜘蛛の鬼の強さに翻弄され拳を受け身体が宙に舞う。動きが早く伊之助は攻撃の動作を見切る事が出来なかった。
幹を殴り倒すのを利用して、自ら宙に舞って後方から頸を斬ろうと刃を振るうが頸の硬さに日輪刀が二本共折れてしまい、そのまま蜘蛛の鬼の拳を喰らって弾き飛ばされる。
（しまった、呼吸で受け身を取り損ねた!!）
地面に落ちた伊之助の首を掴みあげ、蜘蛛の鬼は握り潰す為に力を入れていく。一矢報いる為に頸に折れた刀を刺したが、頸の固さに刺した刀はぴくりとも動かない。
「オ〝レの家族に〝、近づくな〝ァァァ!!」
頸椎を握りつぶされる直前、伊之助は走馬灯を見る。炭治郎、善逸、藤の家紋の婆さん、知らない風景、泣きながら謝る女。
（誰だ……？）
走馬灯は途絶える。死んで途絶えたのではなく、どこからか目にも留まらぬ速さで投げられた剣が伊之助を掴んでいる蜘蛛の鬼の腕を斬り落とし、幹を薙ぎ倒して止まる。腕が落ちたことにより伊之助も地面に落ちる、受け身が取れずに地面に転がりながら剣が飛んできた方角を見る。
ありえない速度、あれが人に刺されれば生を惜しむ瞬間も与えられなかっただろうと改めて思う。

「あらま、おつむに向かって投げたけど逸れてもうた」
（小さい、奴だ、あれはアイツが投げたのか？）
その場に似合わない軽やかな口調で袖頭巾の剣士は現れた。その体躯はとても小柄、そして小馬鹿にするように笑みを浮かべている。
現れた闖入者（ちんにゅうしゃ）にすぐ様蜘蛛の鬼は動く、目にも留まらぬ速さで駆け寄り、拳を振るった。
「オ〝レの家族に〝近づくな〝ァァ!!」
蜘蛛の鬼の拳は届く事は無い。細腕は振るわれた拳を悠々と受け止め、蜘蛛の鬼が動かそうとするが受け止めた手から離れなくなっていた。
「やかましい蜘蛛やなぁ、蜘蛛は蜘蛛らしく巣でも張ってのんびりしときな」
受け止めた拳を離し、瞬時に蜘蛛の鬼の手首を掴んで球を投擲するような動作で蜘蛛の鬼の巨体を投げ飛ばす。巨体は矢の如き速さで木々を巻き込んで飛んでいく。
その様を見せられた伊之助は怪我をしている事も忘れ、猪の被り物の下ではあんぐりと口を開けていた。
袖頭巾の剣士はやれやれと溜め息を吐き、投げた剣を取りに行く。
（なんだ、何なんだアイツ?!）
伊之助の率直な感想は驚愕、あの小さな身体で何倍も差がある蜘蛛の鬼を塵（ゴミ）でも投げるように投げ捨てた。
そして肌で感じる、鬼殺の隊服に身に纏いながらも伊之助は異常な雰囲気に気圧されていた。
「あ、生きとったかボウズ？」
「ボウズじゃねぇっ!!」
睨んでいた伊之助に気づいた袖頭巾は揶揄うように声をかけ、伊之助はボウズと言われた事に腹を立てて叫ぶ。
言い返してくる伊之助を面白がって、かんらからと嘲笑う。
「それだけ元気なら大丈夫や」

鬼と父蜘蛛・弐

猛々しい叫び声が聞こえてくる。先程投げ捨てた蜘蛛の鬼が再度此方に向かって走ってくる。

痛みから回復していない伊之助は身動きが出来ず、どう対処するかを必死に考えていると袖頭巾の剣士は伊之助の前まで近寄って声をかける。

「あんた、刀はどうしたん？」

「あぁっ?!　刀ならアイツの頸を斬る時に折れちまった!!」

「あらま」

鬼を倒すのには日光を浴びさせるか、鬼殺の剣士が帯刀している日輪刀で頸を斬らなければ鬼は死なない。今の口ぶりから袖頭巾の剣士も日輪刀を持っておらず、どうやって蜘蛛の鬼を倒すか悠々と顎に手を当てて考え始めた。

「うち刀ないわ、どないしよう？」

「はぁっ?!　そのでけぇヤツ使わねぇのかよ!!」

何を呑気に考えてやがる、そう言おうとした瞬間に蜘蛛の鬼の拳が袖頭巾の剣士の頭を殴りつけた。

「■■■■ッ!!」

小柄な体躯は紙のように吹き飛ばされ、近くの幹へと打ち付けられる。

脱皮して伊之助を殺しかけた時よりもその動作は早く、蜘蛛の鬼が怒りに満ち溢れて怒気を発している事が瞬時にわかった。

最悪な展開、あれでは息もしていないだろう。頭巾の中身は潰れてぐちゃぐちゃになっているのかもしれないと、悪い考えだけが頭を過る。

しかし心配とは裏腹に、幹に打ち付けられた剣士はゆっくりとまるで椅子から腰を上げるように立ち上がる。

身体についた汚れを手で払い落とし、蜘蛛の鬼を見据える。

「まったく、いらちやなぁ……」

放つ言葉からは怒りは感じない、それどころかどうやって楽しむか

と声が上擦っているようにも聞こえる。
身体が少しずつ動くようになってきた伊之助は身体をゆっくりと起こす。
「おいっ！　お前生きてるのか?!」
「死んどった方がよかった?」
「ちげぇよっ!!」
揶揄ってくる相手に次第に怒りが溜まってくる。手足が不自由なく動くのならば、伊之助はすぐにでも掴みかかりたかったが既に満身創痍。気を抜いたら気を失ってしまう程の重傷を負っている。
その姿を察してか、やれやれと大きく溜め息を吐くと隊服の袖を捲り上げる。露出された腕は綺麗な細腕、どうやってあの巨体を投げ飛ばしたのか疑いたくなる伊之助を置いて深呼吸をする。
「効くかわからへんけど、一つおもろいもの見せたる」
言い終えた瞬間、剣士の姿が一瞬で掻き消えた。そして次に姿を視認した時には蜘蛛の鬼は動かず立ち呆け、剣士は鬼の後ろで大きな頭蓋を右手で掴んで遊んでいた。
そして力なく蜘蛛の鬼は膝をつき、巨体がゆっくりと地面に倒れていく。
何をしでかしたのかはわからない、しかし何かをやったのかは伊之助でも理解できた。
「何したんだ、おめぇッ!!」

神便鬼毒の実験はした事があったが、骨を抜いた事は無かった。そもそも、骨を抜いた所で死ぬ確率はそう高くないと思っていたから。
なのに骨を抜いたのには理由がある、それは……。
(猪頭の前でやったら、驚くだろうな)
「何したんだ、おめぇッ?!」
ただ、驚かせたかっただけ。その姿や態度を見れればとても満足。
流石に全身の骨を抜いたので動かなくはなったが、何れは再生を繰り返して立ち上がるであろう。
頸に刺さっている折れた日輪刀を抜き取り、満身創痍な猪頭の方に

投げ渡しておく。流石にこれでは頸は斬れない、それにもうそろそろここから退散しないと自分が襲われかねない。
「骨抜いただけや、そらぁっ」
再生を遅らせる為に一足で頭を踏み潰し、雑草でも毟るように腕を引きちぎっておいた。
「これで暫くは動けへん、そのうちにあんたは山を下りたらええ」
「はぁああっ?! 俺は下りねえからな!!」
喋る事、為す事全てにおいて反発してくるので実に面白い。揶揄いがいがあるとはまさにこの事。
しかし、全身の傷と首を握り締められていた所を見ると治療をしなければ身体に悪影響を与えるだろう。
「あっ……鬼や」
「なにぃ!?」
鬼がいると言うと愚直に後ろを向く。何処に鬼がいるとは言っていない、私が鬼だからこの蜘蛛の鬼以外に鬼がいるよと教えてあげただけ。
隙だらけの後頭部に向けて、それなりに手加減をして小さな瓢箪を投げ捨てる。
「……ぐおっ!?」
討伐成功、お見事！
冗談はここまでにして、投げた瓢箪は猪頭の後頭部に直撃。猪頭はそのまま地面へと倒れて気を失った。これで怪我が増えても私は知らない、悪くない。
これでこのあとの光景を知るものは私と蜘蛛の鬼だけ。もう手加減はいらない、そろそろ相手をするのも面倒になったので全身全霊で向こう側(地獄)へ送ってやろう。
倒れている鬼の身体を持ち上げ、宙に放り手加減なしの一撃を放つ。
「ほな、さいなら」
――その日、那田蜘蛛山の木々の葉が一斉に散った。

鬼と鬯（ちょう）

――山全体に衝撃が走る。

全身に鳥肌が立つ程の力、胡蝶しのぶは一体の鬼を葬り捕まっていた剣士を助けると衝撃が起こった方向へと踵（きびす）を返す。

あれほどの力、もしかしたら下弦の鬼ではなく上弦の鬼がこの山に潜んでいる可能性がある。

忌むべき怨敵（おんてき）がいるかもしれない、握りしめる柄（つか）が軋（きし）む程の怒りを携えながら走る、走る、走る。

数分もしないうちに衝撃が起こったと思われる場所へと到着した。

あたりには落葉（らくよう）が積み重なり、静かな雰囲気の中で頭巾を被り、鬼殺の服を着た者が立ち尽くしていた。血を全身に浴びた姿で。

しのぶが現状を見る限り、この場で鬼との戦いがあったのは明白であった。辺りに漂う血肉の臭い、これが鬼の物か人の物かは判別はつかないが見定めるには値する。

警戒をしながら一歩、また一歩と柄に手を当てたまま近寄っていく。

（小さい、私よりも背丈が低い。まさかとは思うけど、この子が鬼を打ち倒したの？）

刃の届く位置まで近寄り、しのぶは意を決して唇を開く。

「あのぉ、もしもし……？」

声を掛けた事でようやくしのぶに気づいたのか頭巾の剣士はしのぶ方へとゆっくりと振り返る。振り返る事でしのぶの中の違和感が次第に晴れていく。

破れた頭巾から見える角。全身を血で塗れながらも子供のように楽しんでいるその顔は人間では出来ぬ。

血肉の臭いに、果物の香りが混じりとても気持ちが悪い。思わず眉間に皺を寄せ、不快な臭いに嫌悪感を感じてしまう。

「かんにんな、気づかへんかった」

「いえ、それよりも貴方……鬼ですよね？」

頭巾の鬼の言葉の真意はしのぶにとってはどうでもいい、今は目の前の鬼が下弦ではない事が確信出来た。
目を、眼球に書かれている数を確認しなくてはならない。しのぶの仇の鬼ではないが、集めれる情報は限りなく集めなくてはならない。
「んー……鬼言うたら鬼やけど、あんたが言う鬼とうちはちゃう思うで」
バレてしまった以上、頭巾を被っている必要が無いと鬼は破れた頭巾を放り捨てる。まるで日本人形の様に可愛らしい中に、色気が混じっている矛盾の塊の様な顔つき。
血肉の臭いがなければしのぶであろうとも、酒と果実の香りに誑かされていたであろう。
小馬鹿にするような言葉に眉間の皺はさらに強まるが、必死に心を落ち着けてしのぶは笑顔を取り繕う。
「はぁっ……？　どう違うかはわかりませんが、そんな血塗れで言っていても説得力がないですよ」
今にも襲いかからんと殺気が高まって事を気づいている鬼はどうやって説明するかと悩みつつ、いい事を思いついたとしのぶの殺気に気づいていながらわざと近寄っていく。
「……っ!?」
柄から刀を抜く、抜く動作よりも早く鬼は近寄ってくる。数秒にも満たない動き合い。顔と顔が少しでも動かせば触れ合いそうな程、鬼は顔を近づけてから口を開いて笑いながら言う。
「上手う説明できひんさかい、うちを捕まえて日に晒してもろうてもええ」
冗談、悪い冗談だ。それか耳がおかしくなったのかとしのぶは自分の耳を疑いかけていた。
それを他所に顔を離した鬼は数歩歩いて、振り返って言葉を続ける。
「ほんでも、信用できひんならあんたがしたいように切り刻めばええ」
「馬鹿ですか……？　貴方に利益は一つもない、信じる要素が一つもないじゃないですか」

「うちにはなくても、そっちには利益あるやろ？」
鬼はやはり人とは分かり合えない、鬼の言葉を信じるなどしのぶには出来ず。言葉の嘘を暴く為、しのぶは刀を抜く。
しのぶの日輪刀は刀匠、鉄地河原鉄珍（てっちかわはらてっちん）が作成した、鞘に納める事で毒を調合できる特別な日輪刀。
「その言葉に偽りが無いなら……貴方を斬りますよ？」
切っ先が鬼の喉元に当てられる、少しでも肉を斬れば毒が身体に回り苦痛の後に死に果てるであろう。それどころか鬼ならば死守するべき頸に刃を当てている、死にたくはないと命乞いをするに違いない、しのぶはそう思っていた。
鬼はしのぶの言葉を聞いて小さく息を吐き、呆れたように表情を変えてから自ら刃を掴んで首元に刺していく。
「ええよ」
「なっ!?」
鬼は生きる事に執着する。嘘を平気でついて、平気で人の命を玩具のように弄ぶ。目の前いる鬼は違う、鬼だけど知っている鬼とは違う。
咄嗟に刃をこれ以上刺さない為、柄から手を離して足払いで刃を掴む手を払い除ける。首元からは切っ先が刺さった為、一筋の血が垂れていく。普通ならば傷跡から毒が体全体に周り、人食い鬼なら次第に肉が腐って死んでいく。
しかしこの鬼は腐らず、傷口の周りの皮膚の色が変わる程度でおさまっている。刃から手を離され、自分の流れた血を指で掬って舐めながらしのぶを見据える。
「少し痺れるけど、癖になりそうやわぁ」
この鬼は螺が何本も抜けている、しのぶの本能がそう告げていた。

鬼と灯蛾

鬼、酒呑童子の頸に傷をつけてから数分が経つ。
それから互いに睨み合いが続き、どちらとも動こうとはしなかった。
動かない理由は互いに違い、しのぶは今まで闘ってきた鬼よりも危険と感じたから動けず。酒呑童子はしのぶの考えを読んだ上で、ワザと動かないのであった。
「……？」
「!!!」
睨むしのぶ、笑う酒呑童子。さらに睨むしのぶ、さらに嘲笑う酒呑童子。
表情に腹が立つしのぶは、普段魅せる笑顔など忘れ青筋立てながら、酒呑童子に怒りの言葉をぶつける。
「……何か言ったらどうですか?!」
「あんたこそ、そないに眉間に皺を寄せとったら可愛い顔台無しどすえ」
糠に釘、馬耳東風、何を言っても子供の戯言と揶揄う態度や言動を魅せる鬼に拳を握り締めてしのぶは何とか気を保たせる。
(落ち着け、落ち着くのよ胡蝶しのぶ。目の前の鬼は私を揶揄って楽しんでいる、揶揄う相手には無視をするのが一番、一度冷静になるのよ)
何度も何度も落ち着く為に心の中で唱えて取り繕い、今一度酒呑童子を睨むように見据える。
表情を見た酒呑童子は笑う事を止め、一息吐いてから自分から口を開く。
『――――』
語られる言葉は鬼から紡がれる筈のない言葉、言葉を聞いたしのぶは目を見開いて驚愕の表情を晒す。語り終えた鬼は嗤う、手だけを差し伸べて言葉の返答を待っている。
しのぶは目を閉じて考える、酒呑童子からの提案を受け入れるべき

か否か考えに考える。
——考えた上でしのぶは、酒呑童子の手を握るのだ。
「即刻下山してください、そしてその隊服は置いていってくださいね？」
手を握ったとはいえ、やはり鬼は嫌いなしのぶは毒を散々吐いてさっさと山から出て行けと告げる。揶揄いたい気持ちをぐっと抑え、言われたとおりにしのぶの前から立ち去る事にする。
ここで煽ってしまえば、提案した事が全て水疱に帰す。それは避けたいのでしのぶの目の前で隊服を脱ぎ始める。
「はっ？」
置いていけとはいったが、目の前で脱げとは言っていない。
しのぶが文句を言う前には隊服を脱ぎ捨て、独特な装飾（？）だけになっていた。肌を晒す事に恥も無いのかと、そして最低限しか隠していないそれは最早、下着や服と言える物なのかとしのぶは頭が痛くなった。
「そないにまじまじ見んといてや、すけべ」
蠱惑な表情を魅せ、まじまじと酒呑を見ていたしのぶに頬を赤らめてすけべと言う。
そこでようやく穴が開く程に見ていた事に気づいたしのぶ、同じように頬を赤らめて目をそらして文句を言う。
「何ですか、その服……?!　いや、もう痴女ですか貴女は!?」
「えー？　ええ思うんやどな？」
服を置いていけと言われたので脱いだのに文句を言われ、着ている（？）物にも文句を言われ酒呑はどうしたらいいのだろうかと考える。
考えたが面倒なので、しのぶの言葉を無視して下山するという答えに辿り着く。
「ほなまた会えるのを楽しみにしてんで、しのぶ」
「ちょっと!?　私はまだ!!」
隊服をしのぶに投げ渡し、酒呑童子は脚に力を入れると飛び立つ。
しのぶはその格好のまま行くことを止めようとしたが、止められる

わけもなく酒呑童子は夜の帳の中に消えていった。
「どいつもこいつも……んっ？」
しのぶは消えていった酒呑童子に対して怒りを顕にしながら、一つだけ疑問が浮かぶ。
（あれっ？　私、アイツに名前を言ったっけ……？）
しのぶの疑問は解消される事はなく、その後に鬼の名前を聞く事を思い出して余計に謎が深まっていくのであった。
後日、那田蜘蛛山では一糸纏わぬ姿の少女が天狗の様に空を駆ける姿が噂される事になったが、酒呑が知る由もない。

那田蜘蛛山の麓、椿色の着物に身を包む銀髪の少女は心配から涙目になっていた。
唐突に家主が人に化け、麓で待っていろと言い残して入山していった。いつもやる事成す事が唐突なので慣れてはいたが、辺りに鬼殺隊の気配を感じとってから心配へと様変わり。
もしかしたら鬼殺隊と闘い、死んでしまった？いやいや、あの人は柱でもない限り頸を取られる所なぞ無いだろう。
と、思っていたら柱二人が入山していって椿色の少女こと元下弦の肆零余子（むかご）は慌てふためく。
（あの人はいつもこうだ、いつもいつも……心配で胃に穴が空いてしまいそう。そもそも、鬼殺隊から服をはぎ取る事自体危険が伴うでしょうに……）
服を剥かれた鬼殺隊の剣士を憐れに思ったのか、酒呑の羽織だけではなく最低限辺りを移動出来る程度の衣服を渡しておいた。
「零余子」
「へぇっ？」
考え込んでいると上空から聞き慣れた声が聞こえてくる。嫌な予感がするのですぐ様顔を上げると……そこには上空から滑空してくる酒呑童子がいるではないか。
ほって置いても自分から着地できるだろう、しかし零余子は性格を知っているので落ちてくる場所を予測して走り出す。

腐っても鬼の力を有している零余子、直ぐに落ちる場所に到達して落ちてきた酒呑を受け止める。
小脇に抱える形で落ち着き、一息を吐く零余子の頬をつねりながら酒呑は褒める。
「おおきに、またせたなぁ」
その姿を威厳ある鴉が見ていた事は、酒呑しか見破れなかった。

箸休め、小話

鬼舞辻無惨を祖とする人喰い鬼、鬼として生きる酒呑童子は平安時代から長く息を続けている。

無惨は人として生まれ、病弱な身体に施された薬により日を浴びれぬ人喰い鬼へと変わり大正の時代まで生きてきた。

酒呑童子の出生は不明ではあるが、無惨が鬼となった頃には大江山にて鬼の居城を構えていた。

決定的に違う部分は本来討伐するはずの源の者がおらず、酒呑童子の頸を斬る者がいなかった。

そして暴虐をつくし、若い姫君を攫う筈であった酒呑童子はあまり人を攫いはしなかった。しなかったとは言えど、気分がのった時には京へとおりて愛でたいと思った者を誘惑し、陥落させ側に仕えさせてはいた。

飽きるまで愛で、飽きるまで可愛がり、飽きるまで蕩けさせ、酒呑童子がいなければ生きられない程に依存させた。

「あな、大江の鬼、貴女に喰はるればほいにさぶらふ。いかでか、いかでか我を食はせ給はぬや？」

顔を紅潮させる懇願する姫君の頬に手を這わせ、心の底まで握り潰すような冷徹な眼で姫君を食する。肉体的に、肉欲的に、腹も性も満たして満足して逝くように食べ尽くす。

口元を紅く濡らしながら、酒呑童子は満足して息を吐く。

「ごちそうさま」

鬼は平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代、明治時代、そして大正時代。長く、とても長く生きてきた。

それぞれの時代で色々な人や化け物とも出会い、殺し合い、愛で愛でられ。

その中で酒呑童子が印象に残っている者が戦国時代に一人いた。

武の才に愛された者。全てにおいて規格外の強さを有している剣士、名を縁壱と言った。

（頸を斬られかけそうになったのはあの時だけやったなぁ）

縁壱が振るう剣先は滑るように頸へと走り、本気で回避していなければ頭と身体が二つに分かれていたであろう。
小さい時はあんなに可愛かったのに、どうしてこうも拗れてしまったのかと、その時だけは酒呑童子さえも溜め息を吐いた。
この世界の親子、兄弟、姉妹、双子、恋仲、全てにおいて言葉も足らず態度も足らず。死んでからでは遅いと言うのに、言いたいことは言わなければ伝わらないというのに。
兄の事を語る縁壱の隣で酒呑童子は思うが、口にはせず酒を呷る。
(兄の事を語るときだけ、嬉しそな顔しとる)

時は変わり江戸時代。無惨の目の前で酒を呷り、不快そうな無惨の顔の近くで曖(おくび)をかける。
心底嫌そうな表情をするので、酔っている酒呑童子は腹を抱えて笑って貶す。
貶された無惨は殺そうと腕を振うが、酒呑童子は笑いながら避けてまた一献を傾ける。
今回無惨を呼びつけた理由はとばっちりに対する文句を言い、ついでに揶揄って楽しむ為に酒を呑む。
とばっちりの理由は人喰い鬼を殺す為に作られた鬼殺隊が、酒呑童子を同じ鬼と思い襲ってくる事について。
人から見ればどちらも鬼に違いは無いが、無惨が醜くも生き続けている事で同じに見られてしまうのだ。
腹が立って出会い頭に無惨の頭を蹴っ飛ばした事もあった、あの時は流石に無惨も抵抗をしてきたので何日も殺し合いを続けた記憶が懐かしく感じる。
しかし悪い事もあるが実は良い所もあって、最近では天狗の面をつけた少年を気に入って付け回したりしている。
天狗の面を取ればとても可愛らしく、優しい顔をしている。
それを揶揄うと本気で怒ってくるのだが、怒ってくるのが楽しいのでついつい揶揄ってしまうのだ。
勿論、鬼と分からぬ様に少女の姿で会うようにしている。

角を頭巾で隠す事の方が楽だが、変幻して鬼の角を隠し誤魔化す方が不意な出来事に対応できる。

江戸時代では面倒事を避ける為に常に変幻で角を隠し、少女として振る舞うのが日常であった。

追儺

那田蜘蛛山から数里離れた、名も残らぬような農村の一家（いっか）。
人気も無く、腐臭漂い、明らかに異常な光景が広がる中で鬼は酒を呷る。なみなみと注がれた酒は人間であれば中毒になり、命に係わる量であるが鬼には何も関係は無い。
そして腐臭に顔を歪めている零余子も関係ない、鼻をつまんで息が出来ないようにしてやるのもまた関係ない。
「ぶっはぁっ!? はぁ……はぁ、殺す気ですかぁ!?!?」
「そないなことで、しなんやろ？」
「いや、まぁ、確かにそうですけど!!」
「なら、問題あらへんなぁ」
「あ゛た゛っ゛!?!?」
納得が出来ない零余子を蹴り飛ばし。残っていた徳利の酒を転がった零余子の口に強引に流し込み、目を回している零余子の首根っこを掴み一家から出ていく。
辺りは血だらけ、微かに残った人間だった肉は時間が経って腐りハエやウジが集る。
名も知らぬ小さな農村は、知らぬうちに滅びた。鬼がやったかもしれない、野党が襲ったのかもしれない。しかし、酒呑童子にとってはどうでもいいこと。生きていようが生きていまいが、それは弱肉強食だ。弱いものは強いものに嬲られる、それは世の常。
強くなくてはならない、この首を刎ねて飛ばせるように人は強くなればもっと面白くなる。
これから起きていく楽しい惨状を思い、酒呑童子は笑う。
「そういや、あの山におった下弦はどないな奴やった？」
「う、うべぇ……え、っと。確か下弦の伍、名は累という小さい男の鬼ですね、うぷっ……」
口に突っ込まれていた徳利を吐き出し、零余子は答える。
零余子よりも数が一つ小さいのでは、戦い慣れぬ者では苦戦するであろう。しかし、あの場にいた鬼狩りの柱が来ているならば虫の手足

を千切るように、簡単に刎ねて死んだろう。
一瞬だけ興味を抱き、すぐに興味は消える。
「ほな、残る下弦は四匹ってことになるん？」
「ええ、私が肆で、累が伍なのでそうなりますね」
あえて四匹と言った事には零余子は触れず話を進める。
鬼舞辻　無惨が使役する上弦の鬼、下弦の鬼はそれぞれ壱から陸の数を与えられる。下弦はそう大したことも無いが上弦の鬼は人が対峙して戦うものではないとされている程に力を持っている。
一匹が死に、一人は逃げられた。下弦の鬼は時間が経たずとも無くなるのは明白であろう。
（それはそれは、可哀そうに、可哀そうに）
微塵にも可哀そうとは思わないが、自らの手足となって働ける存在を馬鹿で阿呆な理由で殺してしまうおつむの弱さを嘆いてやる。
人の数よりも鬼の数は少ない、下弦といえど3人も失えば出来る事も後手に回るだろう。超人的な力を持っていようが、数は強い、そして数に遅れをとる事になる。
残しておけば柱は無理としても、一般隊士の数を減らすことはできる。えらい違いではないか。
その事に鬼舞辻は最後まで気づかないだろう、この酒を賭けてもよい。
「……楽しそうですね」
いつの間にか抜け出して土ぼこりを払う。
零余子は不気味に嗤っている酒呑童子に問いかけながら見ほれ、質問の答えは酒呑童子から返ってこない。
零余子にとっては見慣れた表情だ。普通に笑えば国を傾けられる程の美貌をもっているのに、楽しそうに嗤えば――
（――とても、魅せられる）
自ら首を捧げたくなる、この方にならば。

鬼に衣

夢を見る。夢を見る。深い闇の中に堕ちて行き、右も左も。前も後ろも判らない重力も無い世界を只、漂うだけ。産声をあげた時の事、闇の中から這い産まれた事。

出生なぞ、後世の者達が勝手に作り上げる。だから出生は全て？ではあるが、真実でもある。

黒い靄が語りかけてくる。

『女、お前は何ものぞ。何をして鬼である』

その問いかけに馬鹿らしいと嗤い、返答を返さず漂う。あれが何なのかもわからない、わかりたくもない。それどころかそんな靄は無かったとも言い切ろう。

黒い靄は無散すると同時に、意識も夢の世界から醒めていく。

目を開くとそこには何もなかった。付け加えるとしたら、そこには何かがあったが雑草の様に毟られて捨てられた後であった。血の生臭い臭い。肉の腐った鼻につく臭い。蠅が飛び回り、蛆が集る。

等しい暴力が村人達に与えられた、それを可哀そうと憐れむことはしない。

弱いからだ、強くないから死ぬ。至極簡単な理、世は弱肉強食。

（今日は月がまんまるできれい。あとで月見酒もええなぁ）

惨状など気にも留めず、踵を返して帰ろうとしたが――首を狙う斬撃の衝撃波が音もなく襲い掛かる。それを首の薄皮に到達する寸前、身体を強引に動かして躱す。常人では筋肉が千切れるほどの運動。そもそも反射神経が追いつかないだろう。

「無粋やなぁ」

斬撃の相手は既に気配を消していた。十二鬼月（あいつら）に違いは無い。追って首を捻り千切るのは簡単だが。それで月見酒を逃すのは捨て置けないので、小言をもらすだけで帰路につくことにした。

（次は、ゆるさんけど）

普段見せる事が無いよう邪悪な笑顔。……いや、何時も邪悪だし何考えているか見当もつかない。訂正します何時も邪悪です。

っと、話がそれてしまいましたね。あのお方、いつもふらふらと気が向くままに出て行ってはふらふらと帰ってきたりしていまして。金品財宝、高そうな着物、酷い時は気に入った人間を攫ってきたりとやりたい放題なんですよ。

そんなあのお方が、本当にまれに表情を変える時があるんですよ。まるで別人のように、その時のあのお方もまた怖いんですけど、怖さの質が違うんです。

嬲りつくすのが何時もならば、喰らいつくすというべきでしょうか。そんな時のあのお方には絶対に近づきません。鬼殺の柱から逃げていた時の様にそれはもう脱兎。げふんげふん。

つい先日も、それで人を道端の石を無意識で蹴とばす様に簡単に殺してきたのでしょう。全身を真っ赤にして鉄の臭い全開で帰宅なされました。そのまま酒を呑み始めるんですからそれはもう大変ですよ。

全身を洗い、服を着替えさせて、ちょっかいを潜り抜けて。

今は慣れてきましたけど、果物の酒のような甘ったるい香りが何時もするんですから目の毒です。普通の男性ならば見られただけで昇天します。酔いながら攫ってきた者に視線を強引に合わせ続けて実験していたので事実です。可哀そうでした爆笑していましたけれど。名も無き男性……なーむ。

血だらけの着れなくなった着物を焼き捨てながら、どうしたらここまで返り血に濡れるんですかと小言を言ってみたんですけど。回答は決まって〝覚えていない〟なんです。

内心、ボケたんですかと言いたかったんですがぐっと心の中にとどめておきましたよ。ええ。

「むかごぉ、くちにでとるで？」

「えっ!?」

このあと、口にするものおぞましいような罰をうけました。